

スミスの剰余価値の理解ー利潤・地代の特殊な諸形態としての理解と、
マルクスの固有な範疇としての剰余価値の区別、理解について、

スミス「諸国民の富」第四章、第五章から

Pページ	抜粋	スミスの規定に対するコメント
146	・財貨の使用価値と交換価値	
147	・市場価格と自然価格	・マルクスは自然価格とは言わず価値で一貫。
150	・商品の価値は、その商品が、その人に購買または支配させる労働の量に等しい。 ・労働はいっさいの交換価値の実質的な尺度である。	・支配配労働価値ーその商品が購買または支配する商品の労働の量。
151	・あらゆる物の実質価格は、それを獲得するための労苦や煩勞である。 ・貨幣の財貨は一定量の労働の価値を含んでおり、それらを等量の価値を含むものと交換する。 ・労働こそは最初の価格、つまり一切の物に支払われた本源的な購買貨幣である。 ・一切の富が、本源的に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってであって、富を所有していない人々又はそれをある新しい生産物と交換しようとする人々にとってのその価値は、それがそういう人々に購買または支配させる労働の量に等しい。	・ここでは商品の価値が費やされた労苦(労働)規定する。投下労働価値
152	・財産の所有が直接に彼にもたらす力は、購買力すなわち、その時市場にある一切の労働、または一切の有働生産物に対する一定の支配である。 ・あらゆる物の交換 価値は、それが、その所有者にもたらす、この力の大きさに常に等しい。 ・しかしながら、たとえ労働が一切の商品の交換価値の実質的な尺度であっても、商品の価値がふつう評価されるのはそれによってではない。	支配労働価値説
153	・あらゆる商品は、労働と交換され、またそれによって比較されるよりも、いっそうしばしば他の諸商品と交換され、またそれらによって比較される。 それゆえ、その交換価値を評価するには、それが購買しうるある他の商品によるほうが、それが購買しうる労働の量によるよりも一層自然である。	支配労働価値説
154	・大部分の人々もまた特定商品の量というほうが、労働の量というよりも一層よくその意味を理解する。前者は目に見え蝕知しうる物体であるが、後者は抽象的な概念である。前者ほど自然ではなく、また自明なものでもない。 ・物々交換が収束して、貨幣が商業の共通用具になると、あらゆる個々の商品は、ある他の商品と交換されるよりも、一層しばしば貨幣と交換される。	
155	・ある特定量の金・銀で購買または支配しうる労働の量、つまりそれと交換される他の財貨の量は、・・・等量の労働はどこでも労働者にとっては等しい価値である。	支配労働価値説

- 157 ・ 労働は諸商品と同じように実質価格と目
目価格をもっている。その実質価格はそ
れと交換に与えられる生活必需品および
便益品の量に依存し、その名目価格は貨
幣の量に依存する。
- 157 ・ それゆえ、労働は価値の唯一の普遍的な
尺度であると同時に唯一の正確な尺度で
ある。すなわち労働は、いつでもどこで
も、それによって様々な商品の価値を比
較できる唯一の標準である。
- 18 ・ この当時(未開の時代)には、全生産物は
労働者に属し、こういう状態(進歩した社
会状態)のもとでは、ある商品の獲得また
は生産に費やされる労働の量は、その商
品がふつつ購買し、支配し、またはこれ
と交換されるべき労働の量を規定しうる
唯一の事情である。
- ・ 資本が特定の人々の手に蓄積されるや否
や、勤勉な人々の労働が原料の価値に付
加するものによって利潤をあげるために、
彼らに原料や生活資料を供給するようにな
る。
- 187 ・ この事業家にも、利潤として原料の価値
や職人の賃金を支払うに足りるものを越
えるものが与えられなければならない。
- ・ それゆえ、職人たちが原料に付加する価
値は、それ自体を二つの部分に分解する。
その一つは賃金を支払い、他は雇主が
前払いした原料と賃金との全資料に対す
る利潤を支払う。
- ・ 雇主は職人たちの所産を売却することによ
って、自分の資材を回収するに足りる
以上のものを予期できない限り、彼らを使
用するのに何の興味をもてない。
- ・ 利潤は単なる監督や指揮する労働の賃金
ではな。監督や指揮する労働とは何の比
例を持たない。利潤は使用される資材の
価値によって全部的に規定され、資料の
大きさに比例して大とも小ともなる。
- 189 ・ こういう事態では、労働の全生産物は必
ずしも常に労働者に属さない。彼は、彼
を使用する資材の所有者と、それを分け
合わなければならない。
- ・ こうなるとある商品の獲得または生産に
普通費やされる労働の量は、その商品が
ふつつ購買し、支配し、またはこれをこ
れと交換されるべき労働の量を規定しう
る唯一の事情ではない。賃金を前払いし、
対してもまた、当然追加量が支払わなけ
ればならないのは明白である。
- 196 ・ 賃金、利潤および地代は、いっさいの交
換価値の三つの本源的な源泉であると同
時に、いっさいの収入の三つの本源的な
源泉である。
- 223 労働の賃金は、利害関係を同じくしない。
当事者間に結ばれる契両約に依存する。
- ・ 実質価格は価値である
- ・ ここでスミスは、商品の価値が、投下、費や
された労働から、その商品が購買し、支配し、
これと交換される労働の量、という支配労働
に変わる。価値の規定が顛倒される。
- ・ 投下された労働が、①賃金に支払われる労働
量と、②それを越えてつけ加えられる労働(資
本家に支払われる労働)とに把握するが、利潤
が不払い労働(剰余価値)であることまで展開
しない。
- ・ 付加された価値が二つの部分に分解する、と
いうのは正しい。(逆に二つの部分から構成さ
れるという表現は誤り)
総価値(労働)の分解 $\searrow$ 部分価値の総合
- ・ ここでは、資材に対する利潤と述べられ、不
変資本と可変資本との分離、利潤と剰余価値
の混同がある。
- ・ ここでスミスは、生産に費やされた労働量と、
労働者に分け与えられた商品が、購買・支配
しうる労働の量が一致しないことを述べる。
- ・ 原料・資材からも新しい価値(利潤)が生み出
されるかのような表現をしている。
- ・ 後者の、一切の収入の三つの本源的な源泉と
いうのは正しいが、前者の、いっさいの交換
価値の三つの本源的な源泉というのとは間違
いである。’